
SCHOOL・GAME

カワニシ美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SCHOOL・GAME

【Nコード】

N3728BA

【作者名】

カワニシ美玲

【あらすじ】

「今から皆さんにはですね。SCHOOL・GAMEという名の殺し合いゲームを、現実でやってもらいます！」

ある日突然、坂崎二千翔の通う高校。そこがゲームの舞台になっていた。ルールは簡単、決められた制限時間内にクラスメート全員で殺し合いをするだけ。……人を一人殺すごとに、その殺した人間には百万という大金が手渡される。果たして二千翔はこの地獄のゲームを、大切な仲間と共に生き残ることが出来るのか！そして究極の選択……人は『金』と『人の命』の、一体どちらを取るのか！？

プロローグ 〈GAMEの参加者達〉（前書き）

この物語には一部、残酷なシーンが含まれていますので、そういった類の苦手な方は読むのをお控えください。

それでも大丈夫という方々はどうぞ！（・∀・）

プロローグ 〈GAMEの参加者達〉

とある×月×日の水曜日。

俺、坂崎二千翔さかき ちんせうは全速力で家を飛び出していた。ジャムが適当に塗りたくられたトーストを右手、教科書が乱雑に押し込まれた学生鞆がくせい かばんを左手に。

短髪な髪型のおかげで朝っぱらから鏡の前で格闘することもなく、余裕綽々《よゆうしゃくしゃく》とテレビを見ていたのがいけなかった。自分の通う高校は朝の朝礼が九時から始まるのだが、まあ今の時刻はきっかり九時というわけだ。……遅刻である。

家から学校までの距離は、近くもなく遠くもない微妙なところに位置しているため自分は今、大慌てで走っているのである。右手に持っていたトーストを一口に頬張り、勢いよく咀嚼そしゃくする。そしてむせ返る。ごぼごぼとその場で咳払いをして涙目になった目元を拭いてから、再び学校に向けて走り出す。

「おーい、二千翔！」

と後ろから突如として声かけられた。二千翔は歩みを止めて振り返る。同じ高校の制服を着た男が、こちらに向かって走ってくる。自分はその男に見覚えがあった。

「おお、五十嵐！ お前も遅刻か？」

五十嵐敦也いがらし あつや、俺の中学時代からの親友であるこの男は高校になった今でも、悪友としてよくつるんでいる。たまたま受験した高校が自分と一緒に、一緒に受かってしまったのだ。さらには高校でクラスまでも同じになってしまい、ここまで来てしまったのならもう仕方がない、中学時代の悪友コンビ堂々の復活である。

細くあるかどうかの判断が付にくい眉毛に、茶髪にされた髪の毛。ぎろっとした目付きで誰も寄せ付けようとしないうな、恐ろしい雰囲気漂わせてもいる。そんな奴となぜ自分がつるんでいるか？

自分も敦也と似たような部類だからである。敦也に同じく細い眉

毛、髪の色こそ金髪で敦也とは違うものの、他の要素はほとんど敦也に近かった。喧嘩を売られればすぐに買うし、カツアゲなんか敦也と何度やったかも覚えていない。それでも少なからず高校生になっただけはお互いよく落ち着いたほうだ。

今ではクラスのお調子者として通っている。身長は敦也の方が自分より二センチ大きい。ちなみに自分の身長は百八十センチだ。

「ああそうだ。……なあ、もうゆっくり行かねえか？ どうせもう遅刻なんだし」

そんなことを考えていると自分のところまで辿り着いた敦也が、息を切らしながらそう口にする。自分は左手に身に付けていた腕時計を確認して、「そうだな」と返した。

それから二人並んで高校に向かって歩き出す。途中で一般の社会人の連中が、自分達を訝^{いぶか}しげな目で見つめてくるが、敦也が軽く睨み付けただけですぐに目を逸らしていく。

「今日の一時間目ってなんだったっけか？」

「ああ、……確か数学じゃなかったかな」

「うげ、マジかよ……。よかったな俺ら遅刻しというて」

敦也が言って笑う。俺も、「確かにな」と返して笑う。だんだんと学校が見えてきた。俺らがいつも通っている、普段どおりの学校。しかし何やらその様子がおかしい。二千翔は早足で学校に向かいだす。

「お、おいどうしたんだよ二千翔？」

敦也が後ろから声をかけてくるが気にせず走る。敦也も仕方なく学校に向けて走り出した。それから自分は学校の校門の前までやってきて、そこから見える教室をざっと眺めた。……二千翔の心の中で出来た違和感が、次第に現実のものとなっていく。

「どうしたってんだよ？ 二千翔！」

二千翔に追いついた敦也が軽く声を張り上げて質問する。二千翔は何も言わず、ただ学校の教室の方向に人差し指を向ける。敦也はその人差し指を辿っていき、やっとのことでその違和感に気付く。

「……一体どうしたってんだよ？」

敦也が独り言を呟く。

「分からない。……とりあえず、クラスに行こう」

二千翔が言って敦也も頷き、二人で教室に向かって歩き出す。いつも通り下駄箱のところまで行き、靴から上履きに履き替える。敦也も同様だ。それから二人で自分達のクラスである教室に向かって再び歩き出す。その途中に通る他のクラスを二人でチラッと見つめる。

……誰もいないのだ。

他のクラスにいるはずの友達。本来ならばこの時間中は静かに授業を行なっているはずなのに。教師の姿もなければ教室の明かりも消えているのだ。違うクラスもそれに同じくだ。これがさっき二千翔が感じた違和感だった。そして、

「やっぱり……」

二千翔と敦也は声を揃えて前を見つめる。そこには自分達のクラスがあるのだが、なぜか自分達のクラスからだけは明かりが点^{とも}っていない。そして他のクラスとは違い、ざわざわとした生徒の話し声が聞こえてくる。二人は意を決してクラスの中へと飛び込んだ。

「あっ、二千翔さんに敦也さん！」

教室に入るや否や、一人の男子生徒が声をかけてくる。こいつは田^た村^{むら}……、下の名前が思い出せない。とにかく田村だ。ほっそりとした体つきをしていてゾンビのような奴だ。その田村が自分達二人を見て声を上げた。それで他の生徒達が反応する。

「あっ、二千翔君。おはよう」

「ああ、おはよう」

「ねえねえ敦也君。どうして他のクラスの人達、学校に来てないの？」

「知らねえよ！ こっちが聞きてえよ！」

クラスの女子生徒の数名（ちゃらちゃらした雰囲気）が、自分達

に話しかけてくる。それで二千翔は疑問をぶつける。

「え、みんなも他のクラスの事情知らないの？」

「うん。知らないよ、ねえ〜みんな？」

一人の女子生徒（さっき二千翔に挨拶した）である佐々木鈴が、長く伸びた前髪をいじりながらクラスメート全員に聞く。それに対してちらほらと反応が見られる。反応は、「うん」というものだった。このクラスの委員長である女子生徒の高橋優たかはしゆうが二千翔の元に歩み寄って、情報提供をしてくれる。

「私達が学校に来た時にはもう他のクラスの人達は誰もいなかったは……。もしかしたら、何らかの事情で今日休校なんじゃないかしら？」

「それだったら物凄く嬉しいけどな」

優の言葉にクラスの目立ちたがり屋である男子生徒、サイト（本名：斉藤倉之助さいとうくらすけ）が言った。自分と優は軽く苦笑する。敦也は腕を組んで今の現状を冷静に考えている。

「クラスみんなは全員来てるの？」

「うん一応。それで帰ろうかどうか話し合ってたら、二人が教室に入ってきたの」

「ああ、なるほど」

優の言葉を聞き、二千翔は納得する。この学校はだいたい一クラス約三十人の生徒がいて、このクラスの生徒達もそれに例外なくちょうど合わせて三十人だ。男子と女子が綺麗に十五、十五という形で分かれている。自分は出席番号の十四番であって、他の生徒達全員を紹介していくとこんな感じになる。

男子生徒、一番：田村（下の名前忘れた）。二番：佐藤祐樹。

三番：中沢大樹。四番：有坂俊平。五番：五十嵐敦也。六番：

中島浩平。七番：サイト（斉藤倉之助）。八番：新藤涉。九

番：柏木俊。十番：河原雅人。十一番：宮本宏章。十二番：

後藤剛。十三番：関口良太郎。十四番：坂崎二千翔。十五番：

わたなべさとし
渡辺聡。

女子生徒、十六番・佐々木鈴。 十七番・杉田一穂。 十八番・高橋優。 十九番・土本裕子。 二十番・山田静江。 二十一番・茂野まゆみ。 二十二番・天道秋。 二十三番・大沢智恵。 二十四番・金子由香。 二十五番・麻美恭子。 二十六番・藤井恵梨。 二十七番・山崎貴子。 二十八番・高野真紀子。 二十九番・深井さゆり。 三十番・石川久恵。 の以上、三十名の生徒がこのクラスで一年を過ごすことになっている。みんな仲がいいといえば仲がいいし、それほど悪い奴らは集まっていないと思う。自分はそんなこのクラスで、上手くやっていけているほうだ。そんなことを考えていると腕を組んでいた敦也が、「よし」と言っ
て顔を上げた。全員の視線が敦也に向けられる。敦也は軽く咳払いをしてから口を開く。

「……この際だし、もう帰っちゃうか」

その言葉にサイトと敦也の一番のクラス友達である新藤が賛成して立ち上がる。それを優がだめでしょ、と窘める。それで敦也もしぶしながらクラスで教師を待つことにした。別に教室を出て行って他のクラスに顔を出しても、誰もいないのだから。二千翔も自分の席に座り、教師がクラスにやってくるのを待つ。後ろの席に座る河原が話しかけてきて振り向くと、時間つぶしにと漫画を貸してくれた。

「ありがとう」と言葉をかけてから本を受け取る。少年漫画だ。ペラペラと適当にページを開いて目を通していく。程なくして、廊下の方からこつこつと人の歩く音が聞こえてきた。

「先生、来たんじゃないの？」

河原が自分の後ろで言う。自分はとりあえず漫画を河原に返し、教室の二つある扉の片方を見つめる。

他の全員も廊下側の方に目線を合わせていく。

そしてこのクラスの担任である、小畑大輔が教室に入ってきた。そ

れに引き続いて、奇妙なお面を被った人が入ってくる。男か女かの判断が付きにくい、華奢きゃしゃな体つきをしていて、顔は言った通りお面で隠れている。……何だこいつ？

クラスの全員がそいつを見てざわめき出す。それを担任の小畑が、「静かにしろ！」と言って黙らせる。

それで辺りが沈黙したのを確認して、そのお面を被った人は喋りだした。

「へい！ レディース・アード・ジェントルマン！」

口調からしてこいつはどうやら男だ。その男は上下に黒いジャージを着ていて、ジャージの上着のポケットに突っ込んでいた左手をひょいっと出して軽々しく挨拶をしてくる。担任は口を閉ざし、ただ黙ってその男を見つめている。クラスの全員もきよとした顔で、その男をまじまじと見つめる。もちろん自分もだ。

「えーっと……。……何から言えばいいかなー？」

男は頭をぽりぽりと掻かきながら、しばらく考えてこう切り出した。

「……とりあえず、今日皆さんに集まっていたいたのは他でもありません。ちょっとゲームをやってもらうためです！」

男の発言にクラスの全員が頭に疑問符を浮かべて戸惑う。

「そのゲームってというのがね。……これがまたちょーっと興味深いルールなわけですよ」

男は言いながら携帯電話を取り出し、何事かを即座に告げる。すると遠くの方、たぶんこの学校の出入り口の方から大きな音が鳴り響いた。それから男は携帯をしまつて高らかにこう言った。

「今から皆さんにはですね。SCHOOL・GAMEという名の殺し合いゲームを、現実でやってもらいまーす！」

……きつとクラスの中で俺が一番、間抜けな顔をして男の発言を聞いていたと思う。そしてこの後、自分は強く後悔することになる。このまま遅刻を理由に学校をズル休みしておけばよかった、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3728ba/>

SCHOOL・GAME

2012年1月9日19時50分発行